

又吉栄喜「ギンネム屋敷」論

——「悲鳴」としての「握りこぶし」——

一 「ギンネム屋敷」で指摘される物語のわかりにくさ

又吉栄喜の「ギンネム屋敷」^①は、米軍占領下にあった昭和二八年の沖繩で起こった強姦事件から語り始められる。勇吉という青年から、ギンネム屋敷に住む「朝鮮人」が「知恵遅れ」のヨシコーを犯すのを目撃したと聞いた「私」とヨシコーの祖父・おじい は勇吉を伴ってギンネム屋敷に向き、「朝鮮人」を脅迫し金を強請り取ることを思い立つ。勇吉の証言に疑い抱いていた「私」の予測を裏切るように、「朝鮮人」はすんなりと金を支払い、後日、「私」ひとりでこの家を訪ねてほしいと伝える。

再び訪れた「私」を前にした「朝鮮人」は、かつて自身の恋人であった「小莉」を殺害したこと、及び殺害にいたる経緯を語る。「朝鮮人」がなにを言いたかったのかわからないまま、「私」は「朝鮮人」の話に引きずられるように、戦中に亡くした息子の記憶や、別れた元妻ツルのことなどを思い出す。

こうして、「私」に自分の過去を語り終えた「朝鮮人」は、「日

本文字とアメリカ語」で書かれた遺書で、財産を「私」に贈与すると明記し、自殺する。ヨシコーを強姦した真犯人が勇吉であることも判明し、「私」は自らの「握りこぶし」で勇吉を殴りつけ、その場を後にする。

仲井眞建一

「ギンネム屋敷」における物語構造のわかりにくさに関しては、同作品が第四回すばる文学賞（昭和五五年）を受賞した際にも多くの選者が指摘している。同賞の審査委員は秋山駿、三浦哲郎、田久保英夫、井上光晴、黒井千次の五氏であるが、三浦哲郎はそのわかりにくさにおいて作品を「支持することはできない」とし、田久保英夫も「中間で朝鮮人の独白にきり変るところで、方法上の破れ目が出ている」と難じている。「朝鮮人」の独白が「作品の流れにそぐわない」と指摘する黒井千次を含めて、審査委員のうち三人は否定的な評価を下している。その一方、秋山駿は「小説のでこぼこ」を肯定的に評価し、井上光晴に至っては「ぎくしゃくした創作に私が一票を投じたのは、襲来する台風をどこかに予測したのかもしれない」と述べている。評価の是非はともかく、多くが作品の印象を「でこぼこ」や「ぎくしゃく」と表

現している点で、「ギンネム屋敷」の読後感は共通しているといえるだろう。

選評での指摘は、以降の先行研究にも引き継がれており、たとえば新城郁夫は、「多くの断片的物語が拡散的に提示され」る「物語構成は破綻的」と述べ、村上陽子も「さまざまな問題が何一つ解決されないままに投げ出され、不可解さをまもって拡散されていく」と述べている。

このように、「ギンネム屋敷」の「破綻的」「拡散」的構成は当初から指摘されていたが、これまでの研究において、そのわかりにくさが十分に分析されてきたとは言いがたい。本稿では、この「ギンネム屋敷」の物語のわかりにくさに焦点をあて、特に田久保英夫が「方法上の破れ目」と評した「朝鮮人の語り」に注目していく。

「朝鮮人の語り」については、恋人の小莉の「声」が奪われているとして、その暴力的なあり方が指摘されている。新城郁夫は、「朝鮮人の語り」によって小莉は「声を奪」われ、「不在化」を強いられており、勇吉や「朝鮮人」など、「強姦者たちの「主体」性を倒錯的に立ち上げ」るような「文学によるレイプ」が行われていると指摘している。この新城論に対し、村上陽子は、作中、小莉の声は奪われてはいるが、「朝鮮人」の語りを聞く「私」が存在することにより、「声を奪われた」小莉の「亡霊」が回帰してくる可能性を示唆している。しかし村上論では、新城論の「女性たちの声を奪う」という表象のあり方」という批判が引き継がれてしまっているため、「文学によるレイプ」という評価を覆すすまでは至っていない。

両氏はいずれも「声を奪う」ということを問題化しているわけだが、本稿では「ギンネム屋敷」再評価のため、「朝鮮人の語り」のあり方を分析するとともに、最後の場面の「私」の「握りこぶし」を問題化し、そのために、作中に横溢する〈物語〉を分析していく。小莉の「声」が奪われていると読むとき、そこには復元可能な小莉やヨシコーの「声」の实在が安易に想定されてしまっている。この復元可能と想定されている「声」を排し、もはや取り戻せない小莉やヨシコーの「断片」を読み解いていく。「ギンネム屋敷」が開示しているのは、この「断片」を〈物語〉ることの困難さと、その不可能性である。「女性たちの声を奪う」という表象のあり方」を批判する新城論に対し、本稿では、「断片」の〈物語〉化を試みることによって、「女性たちの声」は挫折し続ける〈物語〉の表象として機能していることを明らかにする。

まず本論で扱うターム、〈物語〉という語の定義を述べる。これは野家啓一「〈物語の哲学〉」から参照した。野家啓一は〈物語〉が歴史の叙述に欠かせないということを述べる。

「思い出」はそのままでは「歴史」に転成することはできない。思い出されただけで、それが再び記憶の闇の中に消え入るならば、思い出は甘美な個人的感懐ではあっても、間主観的な歴史ではない。思い出が歴史に転生を遂げるためには、何よりも「物語行為」による媒介が不可欠なのである。思い出は断片的であり、間欠的であり、そこには統一的な筋もなければ有機的連関を組織する脈絡も欠けている。それらの断片を織り合わせ、因果の糸を張りめぐらし、起承転結の結構

をしつらえることよって一枚の布にあえかな文様を浮かび上がらせることこそ、物語行為の役目にはかならない。物語られることよって、断片的な思い出は「構造化」され、また個人的な思い出は「共同化」される。「物語る」という言語行為を通じた思い出の構造化と共同化こそが、ほかならぬ歴史的事実の成立条件なのである。それゆえ、歴史的事実は、ありのままの「客観的事実」であるよりは、むしろ物語行為によつて幾重にも媒介され、変容された「解釈学的事実」と呼ばねばならない。(傍線部筆者)

野家の述べる〈物語〉には三つの位相が見られる。まず第一に、「断片的な思い出」である。主観的であり、共有されていないものだ。そのままでは「記憶の闇の中に消え入る」ものとされる。第二は、思ひ出や情報の「断片」を「因果の糸」によつて縫い合わせ、「起承転結の結構」を備えた〈物語〉である。これは語り継がれるものとしてある。そして第三が、〈物語〉を「共同化」したところに成立する「歴史」である。これらは相互に関連しあう。「物語る」とは「断片的な思い出」を「構造化」し、「共同化」する営みなのである。

ここで新たに問いを立てることができる。では「物語る」ことができるもの、「断片的な思い出」としてしか語ることができないもの、それすらもままならない沈黙を強いられたものたちは、「歴史」から消え失せねばならないのか。

高橋哲哉が『歴史／修正主義』⁵において批判し、野家⁶ものろに言うように、「歴史」を作るためには、「物語る」という行為の

枠を外すことができない。

知覚も想起もできなくなった「死者の声」の痕跡を発掘しつつ構成する語り手の声に耳を傾けつつ、それを聞き手が能動的に再構成する批判的対話の過程にこそ、「過去へ向き合う基本的な態度」はあると言わねばならない。むしろ、歴史は「声高に」物語るべきものではない。しかし、「声低く」ではあれ物語られない限り「死者の声」はわれわれのもとまで届かないのであり、忘却の海の中に消え去るほかはない。歴史の過去に埋没した死者の声を掘り起こし、それを知覚的現在にまで伝達する「精神のリレー」を可能にするものこそ、語り手と聞き手との批判的共同作業とも言うべき「物語り行為」なのである。(略)

野家の言う「聞き手が能動的に再構成する批判的対話」は、村上陽子が、より相互的に「話す―聞くの回路」と表現したものに近いだろう。野家は歴史という枠で〈物語〉を規定しているため、〈物語〉ることから離れた表現の可能性というものを想定していない。本稿では、「ギンネム屋敷」が〈物語〉るという行為自体を扱った作品であると仮定し、その提示するところを読み解いていきたい。「物語られない限り「死者の声」はわれわれのもとまで届かない」と述べる野家に対し、「ギンネム屋敷」は、いわゆる〈物語〉とは異なるかたちで声なき声を聴きとけようとする試みであることを提示する。例えば、物語りえぬものを物語ったとき、それは物語りえぬものとしてあるだろうか。「ギンネム屋

敷」は〈物語〉を扱いながら、そうした物語りえぬものを提示する方法を模索していく。

本稿では、「ギンネム屋敷」に描かれた物語ることの働き及び暴力性を追う。「ギンネム屋敷」では「私」や勇吉、おじい、そして「朝鮮人」が物語るが、それぞれの登場人物たちは暴力性を露にしなから、物語る言葉をもたなかったものたちの「断片」「悲鳴」を歴史の闇から響かせる。「ギンネム屋敷」はこの「悲鳴」を語るために、新城郁夫が批判するような危うい場所に身を降ろしていくのだ。

二 「ギンネム屋敷」に横溢する欲望の物語と、物語る言葉をもたないものたち

物語現時時は終戦から八年後、昭和二八年に設定されている。米軍占領下の中、沖繩及び沖繩の住人たちのアイデンティティの所在は非常にあいまいであった。戦前からの皇民化政策によって日本へと回収されるべく養われたアイデンティティが、敗戦、占領によって行先を失い、「私」や勇吉、おじいのような沖繩の住人は、自らを「沖繩人」もしくは「ウチナンチュ」として新たに定位していかなければならなくなった。そして、「沖繩人」を画定する必要から、戦前、同じく臣民であった朝鮮人を異物として捉えなおすような語りが要請されるに至る。丸川哲史は「冷戦文化論⑥ 燃える沖繩（琉球弧）」において、「ギンネム屋敷」の「朝鮮人」という呼称には「ある種の歴史認識が貫徹されている」と述べる。その呼び方は、「朝鮮人」の戦後の国籍（韓国）

を隠し、戦前から続く差別感情を露呈させていると指摘している。こうした議論をふまえていえば「ギンネム屋敷」における「朝鮮人」の「軍属」という肩書きは事態を複雑化させる要因となっている。当時、沖繩には民事裁判所と軍政裁判所が並列されており、米国の利益や軍人軍属に関する事件は主に軍政裁判所が取り扱った。これは民事裁判所よりも上位に置かれ、米兵もしくは軍属に対して有利な判決が下る場合が多く、さらに当時の琉球政府警察官は米軍人・軍属の犯罪について、捜査権すら有していなかった。

「ギンネム屋敷」では、そのような米軍の力を背景に転倒が生じる。つまり、米軍属の「朝鮮人」が加害者で、「沖繩人」の自分たちが被害者であり続けているという転倒だ。勇吉が脅迫の正統性を、「あれから取るのは親兄弟を殺された弁償金でもあるんだ」と述べるとき、「朝鮮人」は、現在「アメリカの味方」であることによって、戦中にまで遡って「親兄弟を殺したアメリカと擬され、脅迫に「復讐」の正当性が加わる。この正当な「復讐」の物語によって、アメリカに抵抗できない現状から目を逸らし、沖繩の女を「敵」から守る沖繩の男の〈物語〉をも物語ることができる。

おじいもまた、レイプ事件をきっかけにヨシコーに売春させていた後ろめたさを、「朝鮮人」へと転嫁する。自分はヨシコーを大事にしていたのだと「大げさ」な身ぶりでも、「金を取るのは正当だと言いきかせ」る。「わしはヨシコーに代わってやるだけだ。自分のためじゃない。まきあげるとはなんだ」と主張し、「わざとおじいは金を無造作に扱」う。ここでヨシコーの意志は

まったく問題にされず、おじいは、孫思いの自分という〈物語〉を構築していく。

新城郁夫が指摘するように、「不在化されているその女性たちの声を奪う」というその表象のあり方」を非難することもできる。

しかし「不在化される過程において、おじいの「大げさ」な身振りや「わざと」が、「私」に看取されていることも見逃してはならない。「ギンネム屋敷」は、おじいの「大げさ」さや「わざと」を書き込むことによって、いかにしてヨシコーの物語が奪われるかということ明らかにしているからだ。逆にいえば、その過程が書き込まれることでヨシコーが問題化されているのである。

勇吉やおじいは、自らを正当化する物語を他者と共有すべく物語っている。たとえば、勇吉からは「朝鮮人は敵だから脅迫してもよい」と構成することができるし、おじいは身振りによって「孫娘のため」という道理を口にする。両者は、いずれも自らの欲望の物語を暗示している。

ところで、勇吉、おじいの物語の前提となるギンネムは、戦後の沖繩が置かれた状況を考えるうえで極めて重要な隠喩となっている。戦後、沖繩の地形は鉄の暴風と呼ばれる激しい戦火によって、まったく様変わりした。中曽根政善は爆撃により変形した沖繩の地形を眺め、「世界の人々が、沖繩戦のこの惨状を見とどけるまでは、木よ伸びるな、草よ茂るな」と叫んだ。もちろんその認識は米軍にも共有されて、「世界の人々が」沖繩の「惨状を見とどける」ことは許されなかった。単行本化の際に付されたエピソードには、「ギンネム」の説明として左記の記述が加えられた。

ギンネム【銀合歓】熱帯アメリカ原産の常緑樹。花は白色で芳香を放つ。高さ十メートルに達する。終戦後、破壊のあとをカムフラージュするため、米軍は沖繩全土にこの木の種を撒いた。

本文でも「砲弾で焼き尽くした原野をおおい隠すために米軍は莫大な量のギンネムの種を飛行機でまいた、と聞いている」という説明がある。沖繩全土に撒かれた「ギンネム」は生育ち、破壊の跡を隠ぺいしている。それはすでに、「と聞いている」と伝聞であり、忘れたことさえ忘れる、忘却の完成のぎりぎりに至っている。米軍は「ギンネム」を撒いて歴史の忘却を偽装しているのだ。

物語はすべて、米軍が撒いた「ギンネム」を背景に起こる。冒頭から、「ギンネムの林にはさまれた坂道をおり」、「朝鮮人」と出会う。そこで語られる「朝鮮人」の物語は、「私」が「忘れようとしている」ことを思い出させる。つまり、「朝鮮人」の物語は、単なる恨み言にみえるが、しかし恨みに伴う「思い出せ」という訴えが、「忘れろ」という米軍の物語を揺るがし、ひいてはその忘却を背景に組み立てられた「私」や勇吉、おじいの物語までも揺るがす。「朝鮮人」及び小莉を「不在化」する忘却の物語の象徴として、テクストを覆うのが「ギンネム」なのである。注目したいのは、この「ギンネム」の強力な語りに抵抗する「朝鮮人」の語り、常に失敗に向けて開かれているということだ。この「朝鮮人」の語りは慰霊碑、慰霊の塔を巡って作り上げられた

沖繩と日本による共同の物語に疑義を呈するものである。そこでは、物語る言葉を失った「骨」それ自体が問題になる。

三 慰霊碑に納められた遺骨の帰属

沖繩戦では二〇万にも上る死者が出た。そのあまりに膨大な数のため、戦後六〇年あまりを経た現在も未だ戦没者の遺骨の回収が続いている。激戦地であった旧真和志村では、村長金城和信と村民によって回収された遺体が一所に集められ、昭和二十一年、魂魄の塔が建立された¹⁴。これが戦後初の慰霊塔である。昭和二十九年、北海道が県外による初めての慰霊碑、北霊の塔を建立したのを皮切りに続々と慰霊碑が立ち始め、昭和五十六年の時点で全国の慰霊碑が出そろった。その他、諸々の慰霊碑を含めて、現在では三三〇余りの慰霊碑が建立されている。

摩文仁の国立沖繩戦没者墓苑には一八万もの遺骨が祀られているが、それらは全て身元確認の出来なかった「無名戦没者」のものである。多様な戦死者——民間人・日本兵・アメリカ兵、そして臣民、例えば「朝鮮人」のような——は一樣に「国に殉じた」「無名戦没者」となり、個別の死は平板な戦死へと回収された。ベネディクト・アンダーソンがいう「想像の共同体」という概念を引きだすまでもなく、これらの「無名戦没者」の慰霊塔、慰霊碑には「国民的想像力」が充ちており、その下に眠っている名もなき者の「国民的帰属（ナショナルリティ）」を明示する必要はまったくない。その国の兵士の墓に眠っているのが、どうして国民でないことがありえようか、というわけだ。屋嘉比収がその著

書に引用したマリタ・スターケン²¹は、ベトナム戦争記念碑を分析しながら、「スクリーン」の役割に注目している。それは「何かを隠したり映し出す機能」を記念碑がもつという指摘で、「物事を隠すかわりに、支配的な物語を提示し、かつ膨大な記憶や個人的な解釈をも映し出す」と述べる。モニュメントが、一つの「支配的な物語」を提示するのなら、慰霊塔は富山一郎のいう「ナショナル」な「語り」、つまり戦没者の死を全て国家に回収し、「均質なナショナルリズム」へと収斂する「支配的な物語」を暗に語るモニュメントになってしまったといえるだろう。それは昭和三〇年頃から始まり、沖繩の思惑、本土の思惑などが複雑に絡み合いながら生みだされていった。大田昌秀²²は、昭和五年頃から本土や沖繩の遺族会が建立した塔の碑文には、戦争や戦死を賛美する美文調の言葉が多いことを指摘している。ここから戦没者の死が「殉国美談」として語られ、「国」のための死とされる物語を見ることが容易い。

……あなた方は骨といえは、沖繩住民のか、米兵のか、日本兵のか、としか考えませんね、じゃあ、何千何百という朝鮮人は骨まで腐ってしまったのでしょうかね。……だが、考えようによつては、朝鮮人の骨は幸福かもしれません。正体がわからなくなるんですから。ちゃんと慰霊の塔、近頃つくりはじめているようですが、その塔に納骨してくれるんですからね。ただ、中で、朝鮮人の骨と日本兵や沖繩人の骨がけんかをしていても、将来、この塔を訪れる人達は日本兵と沖繩人の骨に花束を、黙禱を捧げるでしょうね、永久に……。

(略)

「朝鮮人」はこの無名戦没者を前提とする「骨」の総体から、「朝鮮人の骨」を分節化することにより、日本と沖繩が作り上げる国家と国民との関係に混乱を呼び起こし、「日本兵と沖繩人の骨」にだけ捧げられた「花束」や「黙禱」の欺瞞を露呈させる。

それは単に「日本」・「沖繩」の物語に対する「朝鮮」というナショナルリズムを提示しているだけでなく、「正体不明」になった「朝鮮人の骨」を指し示しているのだ。「骨まで腐ってしまったのか」という言葉からもわかるように、それが忘れさられ、「沖繩人」や「日本人」の物語に回収されてしまったこと、慰霊塔に納められたあらゆる骨が、均質化されてしまったことを指摘しているのだ。

注目したいのは、「朝鮮人」もまた、小莉を物語ろうとして失敗するということだ。小莉はさらなる空白を突きつける。もはや、存在さえも消えかねない「女」という臃な姿となって、あらゆる物語を拒否する。慰霊塔という戦死者のナショナル物語が「朝鮮人の骨」の空白性によって挫折するように、「朝鮮人」が語る小莉の物語も、小莉、あるいは「女」の沈黙の前に挫折してしまうのだ。

村上陽子がいうように、重要なのは「彼女を（小莉）だと同定できるか否かではない」。しかしそのことを「朝鮮人」の語りが露呈させていることは重要である。「朝鮮人」の語りは、後半に進むに従い狂気と混乱を露わにする。物語は自らの疑惑を振り払うようにして閉じられるが、語り終わってなお、「私」を引きと

め、自分は「夢を見ているんじゃないでしょうね！ 気が狂っているんじゃないでしょうね！」と問いかける。「朝鮮人」は何度も、「夢」を見ているようだといひ、自分の認識に疑問を投げかける。このように、「朝鮮人」の語りの中で小莉は存在を曖昧にするのだ。重要なのは、そのことを「朝鮮人」の語りが示唆し、また「朝鮮人」自らが、語りを根底から揺さぶっているということだ。無論、新城郁夫が指摘するように、「朝鮮人」の語りは小莉の声を奪う危険に何度もさらされている。しかし、「朝鮮人」は、常に自らの認識の危うさを開示することによって、「朝鮮人」の語り自体、疑うことを要求する。

この「朝鮮人」の執拗な留保により、小莉は「朝鮮人」の語りに包摂されない他者性を有し、容易にその姿を決定させない。

今更掘り返してみたってどうしようもありません。月の明るい晩にはあの盛り土の上に女の姿が見える気がしますが、錯覚でしょうか、小莉とは違うようなんですよ。私はこの屋敷の亡霊達にたたられてしまったのでしょいかね、でも亡霊は弱いのが強いのにたたるというじゃありませんか。どうして、私のような弱虫に……。小莉は、ほんとにあの骨ですよ、ね。

ここでは、「小莉とは違う」「女」の存在により、常に小莉でない可能性が示唆される。誤解を恐れず言ってしまうと、埋まっているのは小莉ではない。「朝鮮人」自身が、自分を拒否する小莉の首を絞めて殺すことに、小莉の存在性そのものを、否定したの

だ。ゆえに「朝鮮人」の語っている「女」は、存在すらも怪しくゆらめき、結果、小莉の物語は失敗し続ける。そこでの小莉は、朝鮮人か沖繩人か日本人であるかも定かでなく、ただ「女」とだけ語られる、未だ「土の下にいる」者たちのことだ。

小莉は「朝鮮人」の物語で、言葉を奪われ殺され埋められ、存在すらも曖昧にされた。そのような存在を物語るにはどのような語りが可能になるのだろうか。「女」は言葉を持たず、ただ「姿」をのみ見せ、あらゆる物語化を拒み続ける。

なるほど、「朝鮮人」の語りは小莉その人の声を奪い、なかつたことになってしまうような、際どい行為だ。しかし「朝鮮人」の物語が失敗へと常に開かれているのは、それ自体「女の姿」の空白性にぶち当たり、果てのない応答を試みている証左であり、またその語りの失敗、語る資格がないということを開示し続けることこそが、「女」の身に降りかかった語る術のない暴力、否認、忘却を語る唯一の術なのである。ここにおいて「ギンネム屋敷」は「女」だけでなく、小莉だけでなく、あらゆる犠牲者、「土の下にいる」者たちを呼び起こすことになる。

この失敗を開示する「朝鮮人」の語りと対照的なのが、「私」の語りである。「朝鮮人」を脅迫に向かうメンバーのうち、目撃者の勇吉、ヨシコーの祖父であるおじいに比べ、「私」だけが脅迫の資格を有していないように思える。「あの祖父は標準語がよく話せませんので、私が一緒に来ました」という言説からもわかるように、「私」が主導権を握って交渉にあたることができるのは、「標準語」を「よく話せ」るからにはかならない。つまり、勇吉やおじいが「私」を引き入れたことにより、交渉にあたる資

格もしくは能力が、「標準語」を「よく話せない」者にはなく、二人もまたそれを自覚していたということが窺えるのである。

ここに「標準語」を話す「私」の語りに、もう一人の「私」の語りが挟み込まれていることを想起しなければならぬ。

それは田久保英夫が「方法上の破れ目」と、黒井千次が「作品の流れにそぐわない」と評した、「朝鮮人」の「長い台詞」である。「私」の一人称が覆う「ギンネム屋敷」を、「作品の流れにそぐわない」「朝鮮人」の「私」の「長い台詞」が断ち切り、「方法上の破れ目」を露出する。まさしくこのあり方において、「ギンネム屋敷」は、その言葉の孕む暴力性を示しながら、「標準語」を「よく話せ」る「私」の物語の失敗へと開かれていくのだ。

「朝鮮人」の語りが挿入されるためには、「標準語」によって為されなければならなかった。つまり、この「長い台詞」が朝鮮語や、その他の言葉で語られることはなかった。それは共同化されえないのであり、沖繩及び日本において「標準語」や「英語」のみが、共同化される契機をもつという事実を指摘しえないからだ。それだけでは、「はるばる沖繩くんだりまでひっぱられて来たチョーセナー」の「日本文字と英語で書かれていた」遺書が示す、その「コンテクスト」剝奪の暴力性を指摘しえないのである。野家啓一は「出来事、コンテクスト、時間系列」という要件を備えた言語行為を、とりあえず「物語行為」としているが、「物語行為」が歴史をつくる必要条件として組み込まれているならば、その「要件」を満たさないものには歴史が与えられないということになる。そうであるならば、「はるばる沖繩くんだりまでひっぱられて来たチョーセナー」が物語るためには、「コンテク

スト」としての異国に参入し、その語りが「時間系列」に置かれることを要求しなければならない。つまり、遺書は朝鮮語でなく「日本文字と英語で書かれ」なければならなかった。そもそも物語る行為には、必ず聞き手が要求されるはずで、「朝鮮人」が自国の言葉で物語ることは、昭和二八年の沖繩という「コンテラスト」に置いては困難だ。「コンテラスト」を奪われ、歴史を持ち得ない「朝鮮人」は、「標準語」に依存しなければ自らを聞き手に訴えることができないのである。

こうして語られたのが言葉を奪われた小莉の物語である。「朝鮮人」の言葉は、すでに語りの困難さを前提として発せられている。そうした困難を乗り越えたいうで、ようやく「朝鮮人」の言葉は「私」や沖繩、日本に開かれていくのである。

だが、この「朝鮮人」の語りを「私」は取り込むことができないでいる。そもそも「私」は自らの欲望を満たし、かつ正当化する物語のルートをいくつか保持したまま、自らに資するよう合理化の物語を語るものとして設定されている。脅迫に赴く際、「朝鮮人」とのやり取りを想定しているが、「あなたの暴行現場を村の青年が見た、あなたの家に放火すると騒いで手におえない」とあるように、「朝鮮人」がヨシコーをレイプしたという事実如何でなく、村の青年との仲裁を条件にという布石を打ちながら金銭を奪うという計画を組み立てている。また、ツルの語りを自分の語りに落とし込み、その感情の奔流をやり過ぎることによって「いとおし」さを取り戻す。「朝鮮人」による不可解な遺産贈与にしても、「私」は必死で合理化を試みている。いずれも「私」は自らの欲望に資するように物語を組み立てる。

そのような「私」の合理化による欲望の語りは、「朝鮮人」の「私」による語りを統御しえず、あまつさえ「私」という一人称まで与え、同じ強度、存在感をもつものとして、その「破れ目」を露出させている。

こうして、「ギンネム屋敷」は物語行為を問題化していくのだ。こうして、「朝鮮人」の物語と、語られる小莉が問題化される。このとき安易に小莉の「声」の存在を想定し、その声の「廃棄」だけをいえば、見逃されてしまうものがある。「ギンネム屋敷」はもはやすでに「断片」でしかないものを問題化しているからだ。なにも小莉にそもそも声など無いと言いたいのではない。すでに「断片」でしかなく、「断片」としてしか提示されない小莉について、安易に声なるものを想定し、物語ってしまうことへの警戒を述べているのだ。その意味において、「ギンネム屋敷」は、まさに物語る危険に身をさらしながら警告を発しているテキストなのである。

なぜ「朝鮮人」は自分が否定した小莉を物語らなければならなかったのか。結論を先に言ってしまうえば、それは「朝鮮人」が小莉の「悲鳴」を「断片」として語ろうとしたからに他ならない。「ヨシコー」の存在が重要なのは、この一点においてである。

四 「悲鳴」を提示するために要求されたもの

語る言葉を持たないのは「女」や小莉だけではない。ヨシコーもまた語る言葉をもたない。そのために勇吉は、暴力的にヨシコーの意志を表象してしまう。

「ほんとは俺はあの男が恐かったよ。だから、すぐ逃げ出せるように家の中に入らなかつたんだ。……あの男がわけのわからん朝鮮語でしきりにヨシコーに話しかけているのを見て俺はぞっとしたよ。どうみても気違いの顔だった。……急に泣き出したかと思うと、ヨシコーの首に抱きついたりさ。首をしめてヨシコーを殺すのかと俺は思ったよ。地面に倒れたヨシコーがどこか打ったのか、悲鳴をあげたら、あの男はすぐ顔をあげたよ。長い間、両手で頭をかかえこんだまま身動きしなかったが、やっとヨシコーをおこして、ごみを払いながら何度も頭をさげてあやまつていたよ。……あの男が見えなくなつてから、実際にやつたのは俺だが、だが、ヨシコーが俺に抱きついてきたんだ、ほんとだよ、ウチナンチュドゥうし好きになつて悪くないだろ？ 金で抱くというのがよっぽどきたないじゃないか」

勇吉は声をださずにわらつた。私は握りこぶしで勇吉の横顔を殴つた。勇吉はよろめいた。

「……俺はほんとにヨシコーが好きだよ」

勇吉は私を見ず、ほほを手でおさえたまま、おじいが登場してくるのを待った。私は躊躇したが、歩きだした。

作中ヨシコーの声が直接表記されることはないし、そもそも誰もヨシコーの意見を期待していない。勇吉はヨシコーと結婚したいということ、ヨシコーでなくおじいに言い、おじいの許可さえ得ることができれば、結婚が可能だと考えている。

さらに引用した場面において、勇吉は、ヨシコーの意志を自分の欲望に沿うよう作り上げている。勇吉はヨシコーから「抱きついてきたんだ」、自分ではなくヨシコーこそが、自分に好意を抱いているのだと主張する。さらに「ウチナンチュどうし好きになつて」と表現することによって、自分だけでなくヨシコーも自分のことが好きなのだ、強調している。しかし、これは明らかに勇吉の欲望であり、その欲望にヨシコーを従えているだけであつて、ここからは決してヨシコーの気持ちは窺い知れない。村上陽子が指摘するように、「ヨシコーの行為は男性たちの言葉によつて誘惑的なものに変換され、それによつて彼女の身体に行使される暴力が発動」されているのだ。勇吉は、ヨシコー自身の欲望であるとして、レイプする。

ここで注意しておきたいのは、「朝鮮人」もまた自分の欲望の物語にヨシコーを従わせようとしていたということだ。「朝鮮人」は小莉を殺し、存在を否定した。しかし、彼は「小莉がいるという確信だけがささえ」で生きていたのだ。「朝鮮人」の意識は、自らが求める小莉と、現実には殺してしまった小莉との間で分裂する。自分が必死で見つけた小莉が小莉でないという矛盾が起き、小莉そのものの存在が危うくなる。しかし、この理想の小莉を求める欲望の物語は暴力的な結論を導き出す。あれは小莉ではなかった、ただの「女」だ。ゆえにまだどこかに小莉がいるのではない。そして彼は再び、小莉を探し、ヨシコーに出会う。「朝鮮人」は、ヨシコーを小莉と同一視するとともに「わけのわからん朝鮮語」によつて従わせようと試み、それが叶わないとなると、暴力的に小莉を犯そうとする。しかし、「地面に倒れたヨシコー」

は「悲鳴」をあげる。ヨシコーの「悲鳴」によって、「朝鮮人」は小莉殺害時のグロテスクな反復に気がつき、小莉でないヨシコーを認めたのだ。その反復がグロテスクであるのは小莉を殺害する時にも、目の前にいる小莉（「女」）を、自分が想定する小莉ならしめようとしたことが、明らかにになったためである。

小莉は一言ももの言いませんでした。その縁側に腰かけて、もう逃げるそぶりはみせませんでした。その時は五月の小雨が降ってしまいましたので、私は中に入るように何度もうなりました。だが、身動きしません。私は小莉の腕をつかみましたが、小莉はじつと竹藪の方を見つめていました。ものを隠している目ではありません。ほんとに私を忘れてしまったのかも知れません。私を憶えていてくれたら、私はもはや米軍に媚びなくてもいいのに、とその時、思いました。私は米軍のパティーにはよく出ましたが、アメリカ人の女は好きになれませんでした。私がそつと肩に手を置くと、小莉は突然、立ち、逃げました。私は裸足でかけおり、竹林の土手を這い上がろうとしていた小莉の上着の端をつかみました。すると、小莉は濡れた土に足をすべらし、つかんでいた竹が大きくはね、私の目をしたたか打ちました。私は痛みをこらえましたが、涙があふれて、視界がぼやけ、肩をつかんだつもりが長い髪をひっぱっていました。私はそれをゆり動かし、一言いつてくれ！と哀願しました。小莉は潰れたような悲鳴をあげ、振り返りざま、私の顔につばを吐きかけました。

私は小莉をひきずりおろしました。(略)

ここで「朝鮮人」が、「私はもはや米軍に媚びなくてもいいのに」、「アメリカ人の女は好きになれませんでした」というとき、彼が求めているのは、「好きになれ」る女であり、欲望の対象になりうる女であり、「私に体を与えようとしたに違い」ない、かつての小莉である。そうした「朝鮮人」の「一言いつてくれ！」との要求に対し、小莉から返されたのは、「悲鳴」と「つば」だった。「朝鮮人」が求めた「一言」とは、彼の欲望を満たすものでなくてはならず、決して「悲鳴」でもなければ「つば」でもなかった。欲望を満たすことのない小莉を、彼は暴力によって否認し、沈黙へと追いやる。

つまり、ヨシコーの「悲鳴」により、ヨシコーを小莉とするための暴力と、三か月前の小莉（「女」）を小莉とするための暴力とが、同質のものであると教えられたのだ。他者を、自らが理想とする小莉へと合致せしめようとする点において、ヨシコーと小莉（「女」）への暴力は、全く同一である。

「朝鮮人」はヨシコーの意味の通った言葉ではなく、漏れてしまったその「悲鳴」によって、動きを止める。ここで「朝鮮人」は、はじめて小莉ではなく、ヨシコーを認識し、また反復された「悲鳴」により、改めて自らが殺し、存在を否定した小莉（「女」）を認める。

ヨシコーが発した意味の通らない「悲鳴」を聞くことで、「朝鮮人」はヨシコーを認めるとともに、自らの欲望とその暴力性に気づかされる。「朝鮮人」は、ヨシコーを自分の欲望の物語に沿

うように解釈してしまったこと、それ自体を「あやま」っているのだ。こうして、ヨシコーの「悲鳴」に、小莉殺害が喚起され、続く勇吉の暴力性が露わにされている。

「朝鮮人」と勇吉を隔てているのは、ここでの語り態度である。勇吉がヨシコーの意志をいうとき、その語りは失敗に開かれておらず、そのためにヨシコーの意志は暴力的に表象されてしまふのである。

しかし、勇吉の暴力的な語りからやってくる「悲鳴」こそが——あるいはこれが「朝鮮人」の遺言かもしれない——「私」に「握りこぶし」を作らせる。

「朝鮮人」が、なぜ財産を「私」に贈与したのかは謎である。自殺と贈与は結果的に、「朝鮮人」が自らの可処分を委ねる行為となり、「私」は混乱しながらも合理的な物語を作り上げていく。しかし、その死と贈与は不合理であるがゆえに「私」に謎を残し続ける。「朝鮮人」の物語が「女」の空白性のためにかえって失敗し、不安定なままでしか提出されなかったように、「私」の作り上げた物語も、「朝鮮人」の遺産の不合理のために、いかにも不安定で釈明的にならざるを得ない。謎は決定を許さず、可能性のなかに絶えず引き戻すからだ。そうしかすかな可能性、「破れ目」ができた物語に「悲鳴」がやってくる。「悲鳴」は、ヨシコーのものであるだけでなく、小莉と重なり、「女」と重なり、「朝鮮人」と重なり、「土の下にいる」ものたちに重なる。その「悲鳴」が、「私」に「握りこぶし」を作らせる。

合理化による欲望の物語を語り続けた「私」は、物語る言葉を失い、「握りこぶし」をつくる。それは、なにかを合理的に物語

ることはできない者たちの「悲鳴」を伝える。「悲鳴」を「悲鳴」として、「断片」を「断片」として提示するのが「握りこぶし」である。「私」は、ここではじめて物語る言葉を失ってしまう。

「ギンネム屋敷」は声を奪う過程を描き出すことによって、初めてぎりぎりの応答を描き出した。物語ることのできないものの「悲鳴」を物語ろうと試みて「朝鮮人」は失敗し、「私」もその「朝鮮人」の失敗した物語を包摂できないまま、物語る言葉を失う。「ギンネム屋敷」が、その「さまざま問題が何一つ解決されないままに投げ出され、不可解さをまといつて拡散される」構成において提示するのは、物語ることのできないものを物語る際、それがいかにして失敗するかということである。つまり、物語ることのできないものを物語ることができないものとして提示するためには、物語を成功させてはいけなものである。物語りえない「断片」である「土の下」からの「悲鳴」を示すには、「起承転結の結構」や「構造化」を要求することはできない。

物語化されたとき、「悲鳴」はかき消されてしまうのだ。「断片」を「断片」として、「悲鳴」を「悲鳴」として提示するという困難を試みながら、「朝鮮人」の物語、そしてその困難の前に、物語る言葉を失った「私」の「握りこぶし」に示されている。

勇吉に「悲鳴」を「悲鳴」として伝えるためには、物語る言葉ではなく、ただ「悲鳴」のような「握りこぶし」が必要とされたのだ。

物語が、「起承転結の結構」を要求し、歴史がそれらを前提にして紡がれるのであれば、歴史になり得ない「断片」としての「悲鳴」を響かせるには、それらを要求しない形式が必要となる。

それは、たとえば「朝鮮人」のように、自らの物語の危うさと失敗を開示し続ける語りであり、「私」の「握りこぶし」である。「私」が物語る言葉を失ったとき、「ギンネム屋敷」は、その在り方において歴史、物語に再考を促しているのだ。

確かに「ギンネム屋敷」は「方法上の破れ目」を残している。

物語構成が「破綻的」であることも解消しきれていない。しかし、それは要請されたものでもあった。

そのことが最後の「握りこぶし」に集約されている。「悲鳴」を前に、物語る言葉を失った「私」は、「握りこぶし」をもって勇吉に応えるのだが、その、不合理な、「悲鳴」のような、「握りこぶし」を作った「私」の行方は、勇吉やおじいさんのいる場所ではない。

注

- (1) 『すばる』昭和五五年一二月号 一二月
- (2) 『到来する沖繩 沖繩表象批判論』(平成一九年一月) ※ 初出タイトルは「文学のレイプ——又吉栄喜「ギンネム屋敷」論・戦後沖繩文学における「従軍慰安婦」表象」ソウル大学での発表原稿 『継続する東アジアの戦争と戦後』掲載 平成一七年)
- (3) 村上陽子「亡霊」は誰にたたるか——又吉栄喜「ギンネム屋敷」論——『地域研究』沖繩大学地域研究所 平成二六年三月
- (4) 野家啓一「物語と歴史のあいだ」『物語の哲学』岩波書店 平成一七年二月 ※ 初出タイトルは「物語行為と歴史叙述」『批評空間』第二号平成三年七月
- (5) 岩波書店 平成一三年一月
- (6) 野家啓一「物語の哲学」『増補版へのあとがき』前掲
- (7) 野家啓一「物語の哲学」第六章 時は流れない、それは積み重なる——歴史意識の積時性について『歴史と時間』(『歴史を問う2』岩波書店、平成二二年)に所収
- (8) 『早稲田文芸』一月号 早稲田文学会 平成十六年一月
- (9) 中野育男「米軍統治下沖繩の社会と法」専修大学出版局 平成一七年九月
- (10) 宮里正玄「軍政裁判」『沖繩大百科事典 上巻』沖繩タイムス社 昭和五八年四月
- (11) 垣花豊順「米軍人・軍属の犯罪」『沖繩大百科事典 上巻』前掲
- (12) 中曽根政善「序」(太田昌秀編著『これが沖繩戦だ——写真記録』琉球新報社 昭和五二年)
- (13) 『ギンネム屋敷』集英社 昭和五六年一月
- (14) 比嘉豊光 西谷修編『フォト・ドキュメント 骨の戦世』岩波書店 平成二二年一〇月
- (15) 沖繩遺族連合会編『還らぬ人とともに』財団法人沖繩県遺族連合会 昭和五七年二月
- (16) 以下の議論は北村毅「死者たちの戦後誌 沖繩戦跡をめぐる人々の記憶」(御茶の水書房 平成二二年九月)に多くを依っている。「慰霊塔」「慰霊碑」の区別は、氏の議論に沿う形で使用しているがここでは詳述しない。
- (17) 沖繩遺族連合会編『いそとせ』(財団法人沖繩県遺族連合会 平成七年一二月)と大田昌秀「沖繩戦没者を祀る 慰霊の塔」(那覇出版社 昭和六〇年六月)を参照にした。
- (18) ベネディクト・アンダーソン／白石隆・白石さや『定本 想像の共同体 ナショナルイズムの起源と流行』書籍工房早山 平成五年三月

(19) 地上戦が行われたため沖縄では民間人も軍属として扱われた。

(20) 屋嘉比収「戦没者の追悼と平和の礎」『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす——記憶をいかに継承するか』世織書房 平成一九年一〇月(※初出『季刊 戦争責任研究』第三六号 日本戦争責任資料センター 平成一四年五月)

(21) マリタ・スターケン／訳 中條献「壁、スクリーン、イメージ——ベトナム戦争記念碑——」『思想』第八号 岩波書店 平成八年八月

(22) 『増補 戦場の記憶』日本経済評論社 平成一八年七月

(23) 大田昌秀『沖縄戦没者を祀る 慰霊の塔』前掲

(なかいまけんいち 大学院博士後期課程在學生)